

[ドウシ・テ]

道志 手帖

2021 no.25



道志村全図

道志手帖 no.25 に出てくる おもな地名

● 地名・施設名索引

赤倉橋 (あくらはし)	4
朝日山 (あさひやま)	6,7
大室指 (おおむろさず)	3
大渡 (おわた)	9,16
大渡キャンプ場 (おわたきゃんぷじょう)	9
神地 (かんじ)	4
北の勢堂 (きたのせどう)	21
久保 (くぼ)	9
笹久根 (ささくね)	16
白井平 (しろいだいら)	16
善之木 (ぜんのみ)	16
体験農園 (たいけんのうえん)	13
竹之本 (たけのもと)	16
月夜野 (つきよの)	22
菜畑山 (なばたけやま)	6,7
農産物直売所 MATOBA (のうさんぶつちよくばいじよまとば)	22
野原 (のほら)	16
的様 (まとさま)	9
ヤグラ沢 (やぐらさわ)	6,7,9

Access





道志手帖

2021 no.25

Contents

gallery	「連載」お仕事拝見⑭	「連載」道志の見聞録②	道祖神祭り——「御神木」に込められた祈り	布ぞうり作り（後編）	県内の重要伝統的建造物保存地区を訪ねて②	甲州市塩山下小田原上条集落	「連載」お仕事拝見⑭	農産物直売所マトバ「お弁当処」	gallery
依編みに使った「ストロ」	香西恵	山梨の『県の石』①岩石	香西恵	佐藤八重子	佐藤光良	仲井義晶	西蔭正子さん	仲井義晶	香西恵
.....
22	22	8	10	17	20	20	22	22	22

「道志手帖」とは？

略して「ドウシテ」。「どうしてどんなところ？」
という関心から生まれた冊子です。
村で生活していて気になったこと、
おもしろいなおもったこと、
発見や驚きを報告していきます。



表紙写真

かつて炭俵を編むさいに使われた「ストロ」と呼ばれる道具（大室指地区・諏訪本充弘さん所蔵）。
無数の傷としつとりと手になじむ丸みが、使い込まれた年月を語る（詳細22頁）。

道志の民話

⑦

赤倉橋の狐と馬引き



この部落と、この隣の部落。あそこを、学校あるらあねえ。

そこんとこ、この部落の間に赤倉橋というがあったわけ。いまもあるにはある。ただ、国道なつて、ええ橋になつただけえ。

そこへ、よく、馬引きいちゃあ、みんな炭を専門に焼いたから、その炭を馬へ付けて、そして、都留市まで行つた。

都留市行つて、その炭を売つて、そして、必要なものを、買って馬へ付けて、帰つてくるわけ。

まあ、朝、冬の日なんぞ、どうしても、地のおきまえぐらいまでは、灯りで行くわけだ。提灯で。

行つて、夜が明ければ、蝋燭消して、藪へつけておく。提灯わ。

そして、来るようになるつうと、また、その辺から、日が暮れるわけ。そおだから、つかへとく提灯をまた、灯りをつけて、そして、帰つてきたわけ。そおして、赤倉橋来るというと、ようよう橋かかろと思つと

「ほいほい、ほらほら、ほらほら」

つう、向こうから馬が来るような音がするわけ。それから、「こりゃあ、馬くりゃあ」つうでえ、渡らずに、橋つめの広いところへ、



休んで、待っているわけえ。
 そうする、また、音もしくなつてえ。
 するから、「へえ、行つただかなあ」
 と思つてねえ、それから、また、その橋にか
 かるうと思つて、するとい
 うと、また、「ほいほい、ほらほらちゅうで
 え、馬引いてくる音がするでえ。」

それから、そういうめにあつたわけ。ほお
 してえ、したら、すこし、なんちゅうかあ、
 豪傑の大将があ。「どうも、不思議でならね
 から、あんでえ、かまわなね。
 みんな、いつてみる」ちゅうで、渡りかた
 ら、「ほいほい、ほらほら、ほらほら」
 ちゅうわけでえ、馬を引いて来るような音が



する。
 それから、見だところが、づらづらづら
 づらづらーと、すれちがう。
 手をつんでいつてみたら、狐か狸を見たい
 うなあ、その手ざわりが、あつたという話を
 聞いただ。ほんでえ、うちへ来て、その馬か
 ら荷をおろそうと思つたら、
 油あげや魚やみんな取られちまつたちゅう。
 狐にだまされて、休ませといて、取るだから。
 向こうから、馬を追いかけるような。騒ぎを
 させて、そこに、立ち往生させておいただ。
 語り・金子高史

作画 仲井義晶

出典 民話の手帖49号(1991)「道志の民話」より

沢林道 ~ 本坂峠

峠から東は朝日山(赤鞍岳)へ
西は菜畑山へ



ヤグラ沢林道はほとんど植林の中で、途中に休業中のキャンプ場があります。後半はダート道で少し荒れています。登山道は渡渉地点が数ヶ所ありますが、橋がこわれかけているので注意して下さい。ピンクテープ案内をよく確認すること。

●和出バス停から林道終点まで約40分＝峠まで約1時間半です。



ヤグラ



作・画 K-CO 2021.1



その2 山梨の『県の石』①岩石

道志村の皆さんお久しぶりです。お元気ででしょうか？宇野です。

中々、ホイホイと出歩けなくなってしまうでしたね。かくいう自分も遠出しにくくなってしまうました。次、道志に行くのはいつになるやら。

遠出できない時こそ地元を見直してみましよう。足元に意外な発見があるかもしれません。今回から数回にわたってどこでも観察できる、石の話を書いていきたいと思いません。

『県の石』というものがあります。日本地質学会が各都道府県それぞれを象徴する石(岩石・鉱物・化石の3部門ある)を『県の石』として認定しました。もちろんその中には山梨県の『県の石』もあって、岩石が玄武岩溶岩、鉱物は日



西湖西岸の青木ヶ原樹海溶岩

約1150年前に富士山の麓から噴出した溶岩で、西湖・精進湖・本栖湖・青木ヶ原樹海・風穴・氷穴はこの噴火で形作られました。



青木ヶ原樹海溶岩

富士山の一連の火山活動を代表する溶岩です。有色鉱物を多く含む黒い色と特徴的な大きな気泡が目立ちます。

本式双晶水晶、化石は富士川層群の貝化石だそうです。

今回は山梨県の岩石『玄武岩溶岩』に注目して少しお話ししたいと思えます。「いきなり地味だな……」

さて、山梨県の『県の石』から岩石の玄武岩溶岩、「黒っ

ぽい色をした富士山の溶岩」と、言うと思いつかぶかもしれません。こうして誰もがパツ

と思いつかべる事の出来るというのが認定された理由かもしれませぬ。それだけ人々の生活に根差してきたということでしょう。「山梨で溶岩と言ったら富士山！」と、言うぐらいに富士山の玄武岩溶



玄武岩質の岩石の拡大

こちらは道志川の河原で良く見かける玄武岩、富士山の溶岩の様に気泡がありますが長い年月の間にその気泡の中に白い沸石（※2）などの鉱物ができて、気泡の空洞を埋めています。



大渡キャンプ場の枕状溶岩

玄武岩溶岩が水中に噴出すると急冷されて円筒形の枕が積み重なったような形に固まり、これを枕状溶岩と言います。海底火山特有の溶岩で道志村に海底火山があった事を物語っているのです。

岩は有名で、風穴や氷穴、溶岩樹形なんかの富士山を代表する景勝を形作っているものもこの玄武岩溶岩です。あまり知られてはいませんが遠く都留の田原の滝や大月の猿橋なんかも富士山の玄武岩溶岩が関係していたりします。

一方で道志村、実は玄武岩の溶岩は道志村でも観られるのです。ただ、それは火山活動が始まって数千年という比較的新しい火山である富士山とは全然関係の無い1500万年〜800万年も前の海底火山由来の物になります。的確のやや下流・

櫓沢・久保など下の地域を中心に至るところで見かけます。中でも凄いのが大渡キャンプ場の場内にある枕状溶岩の巨大な転石（※1）です。未だ噴出地点がどこだかは突き止め

ていないのですが、見つけた時は道志にこれほどはつきりと特徴を示す枕状溶岩があることに正直とても驚きました。

一見、火山とは縁の無さそうな道志村ですが、気にしながら歩いているとあちこちで大昔の火山活動の痕跡を観ることが出来ます。皆さんも良かったら探してみてください。もしかしたら家の近所にあるかも知れません。

「もし、道志『村の石』というのがあったら何だろう？」と、考えたとき、皆さんは何を思い浮かべるでしょう？

まだ公式・非公式にも決まってはいませんが……。あつたら面白いですね。『県の石』シリーズが終わったら、いずれ『村の石』も取り上げてみたいと思います。

（宇野夏樹）

※1 転石 崖崩れや水の流れなど自然の力で他の場所から移動してきた大きな石です。大きな河原石と言った方がイメージしやすいかもしれません。

※2 沸石 低温の熱水がある環境で出来る鉱物で、道志村で見られるものとしては束沸石・濁沸石・菱沸石・スコレス沸石など数種類が確認されています。

道祖神祭り

「御神木」おしんぼくに込められた祈り



都留市十日市場にて (2012.1.9)

今から10年ほど前のこと。山梨県都留市で初めて「御神木」おしんぼく（などと呼ばれるらしい、当時は呼び名もわからなかったもの※1）を目にしたときの驚きは今も忘れられない。いつもの見慣れたまちの景色の中に、ある日いきなり、よくわからないものが出現していた。ギョツとするような、思わずしげしげと確認してしまうような、衝撃的な出会いだった。

それまで「小正月」も「道祖神（※2）」のことも知らなかった私は、目にしたものが一体何なのか検討もつかなかった。後に、それが「どんどん焼き（道祖神祭り）（※3）」のさいに、道祖神碑のそばに神様の依り代として立てられるもので、その形や吊るしてあるもの一つひとつに意味があり、無病息災や五穀豊穡など、さまざまな祈りが込められていることを知った。

しかし「なんでこんなものをわざわざ立てるのだろう？」という疑問はなくならず、その圧倒的な外観の魅力と相まって、長年気になる存在

※1 「梵天竿」「サイノカミ」「ご神木」などとも呼ばれる。「御（お）神木」は山中湖での呼称。

※2 辻に立てられ、悪いものの侵入を防ぐ。旅の安全を守る神、五穀豊穡の神、村の守り神、子どもと関わり深い神などといわれる。



山中湖平野地区では近隣でも随一の高さを誇るカラマツの御神木（ほかの地域ではスギ・ヒノキが使われることが多いが、山中湖は寒冷な気候のため植林されている樹種はカラマツが一般的）をクレーンで立てる。これまでは道祖神碑の前の道路を通行止めにして立てていたが、2年前に専用の広場が整備された。子ども達の習字紙や上部に抱きついている赤ん坊を模した飾りもの（右中写真・14頁）が目玉を引く。

であり続けている。

県内各地で盛んな道祖神祭りだが、道志では「どんどん焼き」はするけれど、それとは別に何かを立てたり飾ったりする習慣はない。一方、道志のお隣り、山中湖やその隣りの忍野では、独自の形の飾りものをするらしい。この時期にしか見られない風景を訪ねて、今年こそ、と探しに行った。

山中湖・忍野の道祖神祭り

1月14日（木）、午後3時半ごろ山中湖平野に着くと、突き当たりの広場でちょうど「御神木」のようなものをクレーンで立てようとしているところに出会った。そばの道祖神碑の前では、人が集まり、神事が行われようとしていた。完全に木が立ちあがるには時間がかかりそうなので、ぐるりと湖畔を一周し、忍野方面へも探しに行く。何か所か「御神木」のようなものや、笹や色紙で飾られ提灯に照らされた道祖神碑を見ることができた。

※3 小正月（1月14日前後）にお正月飾りなどを焚き上げ無病息災を願う行事。子どもが主役の祭り。「どんどん焼き」「左義長」ともいう。



山中湖から忍野に入って最初に目に入る内野地区の御神木。支柱には今年ならではの「ヨゲンノトリ」の姿があった。(江戸時代に書かれた市川村(現山梨市)の名主の日記に登場する不思議な鳥のこと。伝染病を予言し、その姿を仰ぎ信心するものは助かるとされた。山梨県立博物館が命名し、昨年コロナ禍で話題になった。)

近隣でも同じものは一つとしてなく、色とりどりのそれが、歩いて行ける近さで点在しているのを見つけると、集落ごとに競い合うかのような、そこに込められた熱量や誇りのようなものが感じられる。どこにあるのか探して歩く道中は宝探しのよう楽しく、見つけたときの非日常の光景の鮮やかさは、期待を裏切らない。だんだんと日が暮れようとしているなか、「御神木」の足元では、「どんどん焼き」の炎がちらほらあがり始める。

すっかり暗くなつてから平野の広場に戻つてくると、もうしっかりと木が立て終えられていて、夜空にライトアップされた「御神木」の姿が浮かび上がっていた。

続けるのはなぜか

都留での「御神木」との最初の出会いのあと、調べたことを書き留めたものがある。何年かぶりに読み返してみると、当時の「腑に落ちなさ」が伝わってくる。込められた意味は



日が暮れていくなか、昼間とはまた違う佇まいを見せる。隣りのものと歩いて行ける近さにあり、姿形は似ているがよく見ると違う。風船の飾りつけが珍しい。十字に組まれた木は、四方を指し、蜘蛛の巣のように張り巡らされた縄の形は、神様の目を表し、四方から悪いものを防ぐという意味があるのだとか。

わかってても、だからと言ってなぜ今も続けているのか、じっさいに行事を受け継ぐ人々の思いがよくわからなかったからだ。健康で、今ほどは災害も日常ではなかった当時、「無病息災」や「五穀豊穰」と聞いても、いまひとつピンとこなかったのは無理もない。

それが今ではなんとなくわかるようになってしまった。信仰はさておき、昔ながらの風習という祈りの機会が身近にあれば、今なら有り難く参加して「無病息災」を心から祈る。

道志では、例年体験農園で開催される「どんど焼き」が、今年はコロナ対策のために中止になった。県内各地で祭りが中止されたり、規模を縮小されたりしたらしい。

そうした対応は仕方がないのかもしれないが、コロナ禍にある今ほど、祭りに込められた祈りがしみじみと腑に落ちてくる年はない。



忍野村忍草地区では道祖神碑の両脇に笹を立て色とりどりに飾り付ける。石碑の元には賽銭箱が設置され、お供えのお酒が並ぶ。ずらりと吊るされた「ヒイチ」にはどれも買い取り済みを示す札がついていた。暗くなると提灯に灯がともり、道端で一層の存在感を放つ。



※番号は写真と対応

御神木撮影場所

飾りいろいろ



ヒイチ

三角形の座布団のような飾り。火打石を携帯する袋を模していて、火伏や厄よけの意味がある。

サルッコ (ホウコ)

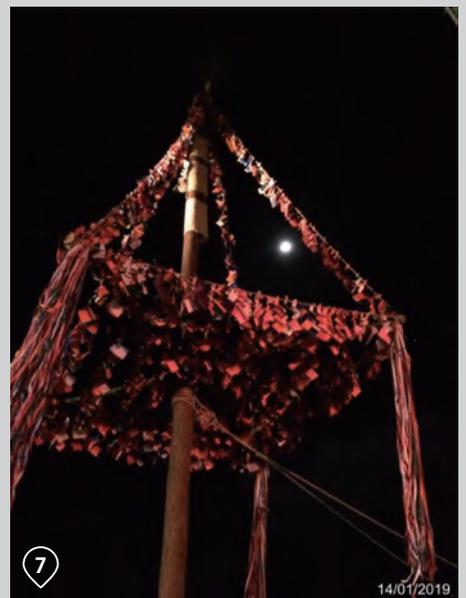
赤ん坊を模した飾り。前年に子どもが生まれた家が奉納する。かわいがると子どもを授かるといわれる。



祭り 道祖神

昼と夜で違う顔を見せる「御神木」。6年分のアルバムから、各地のとっておきをご紹介します。

撮影：佐藤太清さん



道志の 道祖神 祭り

道志に「御神木」が無いわけ

近隣の「御神木」のことを考えるにつけ、どうして道志には「御神木」のようなものを立てる習慣がなかったのか、一層不思議に思えてくる。お隣にある習慣が、なぜ伝わらなかったのか？ いろいろ考えてみて一番もつともらしいのは、文化的に山梨県よりも神奈川県に近かったから、だろうか。「御神木」などを立てるのは山梨県独特の風習で、神奈川県では見られない。村内でも神

奈川県寄りの地域、野原地区で現在

行われている「どんどん焼き」のよす（写真）は神奈川県相模原市などで行われているものと似ている。一方で、道志の道祖神祭りについて詳しい調査報告書（※1）によると、山中湖寄りの地域（白井平・善之木地区）には忍野方面から伝わったと思われる双体道祖神碑があり、一時期はそこで笹飾りを立てていたこともあったが、その習慣は根付かなかつたようだ。



野原地区の「どんどん焼き」(2014.1.14)

道志の「どんどん焼き」と「イボ石」

祭りの中心となるのは道祖神碑だが、村内には三カ所しか存在しない。二つは前途の白井平・善之木地区、残り一つは大渡地区である。

上（かみ）※2の地域では、そもそも「どんどん焼き」という風習自体、昔から無かつたらしい。近隣の市町村では道を歩けば当たり前に道祖神碑を見かけるなか、「存在しなかつた」というのは珍しく、そのわけが気になつてくる。また、後に石碑が作られた地域でも、行事として根付くことはなかつたらしい。なぜだろうか。

一方、下の地域には、「イボ石」と呼ばれる河原石をご神体とする独特な「どんどん焼き」の風習があった（※3）。たとえば竹之本地区では子ども達が木でつくった刀を腰にさし、焼いた「イボ石」の奪い合いをした（※4）。野原や大渡地区では、草葺きの小屋をつくり、なかに「イボ石」を入れて燃やした。笹久根地区では、「道祖神様も大変だね」と言いながら「イボ石」を火の中にいれたという。集落ごとに「イボ石」が親しまれ、



竹之本地区個人宅の「イボ石」(2014.3.28)

祭りに欠かせない存在だつたことが伺える。「イボ石」は、石の奪い合いでたびたび紛失し、その都度河原から拾って補充していたが、現存しているのはなんと大渡地区の一カ所のみという。

祭りの主体となる子ども達の不在で、道志の「どんどん焼き」はなくなりつつある。現在続けられている祭りは有志の大人によるもので、そこにかつての主役「イボ石」の姿はなくなつてしまった。

今も継承される近隣地域の「御神木」と、ひっそり消えていく道志の「イボ石」。二つの風習の対照的な行く末に「どうして？」が暮る。

※1 山梨県史編さん専門委員会民俗部会編『山梨県史民俗調査報告書 第六集 道志の民俗 一南都留郡道志村一』山梨県、2001年。／※2 上と下：村内で山中湖寄りの地域を上（かみ）、相模原寄りの地域を下（しも）と呼ぶ。／※3 石については本誌21号、「イボ石」の思い出については4号、現在の「どんどん焼き」については3号に関連記事。／※4 「石の奪い合い」をする理由について、伊藤堅吉著『道志七里』では「祭りを長引かせるため」ではないかと推察されている。

布ぞうり作り

後編



布ぞうり前編では、編む材料となる古布を蘇らせる行程を中心にした。

後編では、歴史を眺めながら、布ひもがぞうりという形になるまでを紹介したい。



Wikipedia 「ぞうり」より出典

1900年初めの日本に タイムトリップ

座っている女の子はお孫さんなのか。なんとほのぼのする光景だろうか。道志村のご婦人より「昔、お祭りなどの時には、藁ぞうりの鼻緒の所だけ布で巻いて華やかにしてもらったのが、とても嬉しかった。」と当時を微笑みながら語ってくくださった事を昨日のように思い出す。このような光景があちらこちらにあったのかもしれない。

この写真を撮影したのは、1914年〜1918年に日本に滞在していた外国人とウイキペディアで紹介されている。この写真のタイトルが面白い。「Home made shoes in the process」と写

真横に手書きで書いてある。「手作りの靴の過程」という事だろう。ぞうりを履物(靴)として理解していたのだ。また、「この男は買

易靴職人だったのか。それとも全ての家族が家で靴を作ることができるメンバーだったのだろうか。」とコメントを残している。靴(ぞうり)を誰もが普通に手作りしていた当時の日本の事を、理解しかねていたようだ。そうそう、昔はみな靴(ぞうり)職人でもあったし、着物職人でもあった、作物もつくり、生きる上での職人の技が地域に家族に伝承されていたのだ。

ヒューマンスケール

産業革命以来、人類はすっかり機械に頼ってきたようだ。しかし日本の1900年の初めにはまだ

まだ体験され、継承され、無駄なエネルギーもいらぬ機械が人の内部にある事を私は布ぞうり作りを通して知る事が出来た。それは本当に驚きだった。

布ぞうり作りは、慣れないうちには余計な身体力を使ってしまうので、それは私にはきつかった。あちこち痛いと感じつても継続することで、眠っていた脳の記憶がある時、呼び覚まされた感覚が現れた。スケールなしで何cm、何mm感覚がわかってくるのだ。手足の指、手足の幅、身体の全てが連動してスケール付きの機械のようになるのだ。全身を使い、脳が連動する。使わないと、眠ってしまったままの潜在能力がある事を知った事は大きな喜びだった。

布ぞうりを指導してください、道志村在住の前川タサさんは、その人の足の寸法も測らずに、見た感じでぴったりのサイズで作ってしまう。千足をゆうに超えて作ってこられた人の熟練された能力な

のだろう。潜在能力の存在は知る事は出来たのだが、腰が痛くなってしまうので、私はもっぱら編み台の世話になっている。(苦笑)

コロナ禍と布ぞうり

昨年3月から、毎週1回続けてきた布ぞうり作りの集まりも今は休止している(2021年1月現在)。感染防止は徹底してきたが、新たに未知の株のコロナが入り、その正体もわかっていないし、緊急事態宣言が他県で発令されたのを鑑みた事だった。

布ぞうり作りでは捨てられる布団側を再利用し、資源を最大限利用する事をしてきた。機械に頼るのではなく、自分たちの潜在能力を呼びさまし、全身を使って編んできた。小さな集まりだが、ここには今、コロナ禍の大事なエッセンスが含まれている。森林の破壊で住む所を追われた野生動物が人と近距離になってしまい新型コロナウイルスが生まれたという説がある。厄

編む行程

編む際の材料・道具



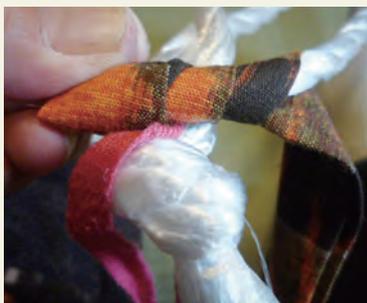
4 指の部分を編み終わったら、測りながら編む



1 PPロープを2重にし、足指に引っ掛ける



5 鼻緒の所まで編んだ所



2 布ひも12cmほどを数回きつくロープにまく



6 鼻緒はよって、縄なえる



3 指側から少しずつ広く編む



(一足分)
PPロープ 幅8mm 1.75m×2本、
かんし(手芸用)、ひも通しなど



(半足分・23cm位)
布ひも8本(1本が1.3mあると編みやすい)、鼻緒1本、前緒1本



私の使っている編み台。昭和4年生まれの友人の手作り



2020年12月 感染対策をして続けていた頃

介な感染症だが、引き金を引いたのは、自然だろうか。人間だろうか。やはり、人間だろうか。だとすれば、その人間がもう一度立ち戻り、自然環境を破壊をしない世界、機械だけに頼らず、仲間と手作りする世界、そんな世界が拡がれば新たな感染症の発生もきつと減っていくに違いない。(佐藤八重子)



13 前緒もよって縄なえてから鼻緒に結ぶ



14 完成

後記

行程のポイントを写真で紹介したが、実際には一緒に作ってみるのが一番！ 教え合ったり、それぞれの布ぞうりの個性を楽しんだり。再開できる日が早く来ることを祈るばかりです。興味を持ってくださった新しい仲間との出会いも楽しみに！！朝のこない夜はないから。



10 前緒の芯を作る。



11 芯を前緒に入れる



12 かんしを使って底から前緒を出す



7 鼻緒の残りひもで続けて編む



8 かかと近くにきたら小さめに編む



9 足をぞうりにのせて、PPロープを指側に引っ張る

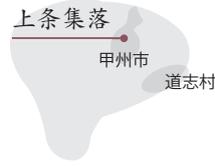
県内の

重要伝統的建造物

保存地区を

訪ねて

●甲州市塩山下小田原
上条集落



左：茅葺に復元された「もしもしの家」 右：修復された付属屋（体験施設として活用）

前号で紹介した塩山下小田原の上条集落を紹介します。全国で「重伝建」として120件が指定されていますが、ここ上条集落は平成27年7月8日110件目養蚕集落として指定されました。

集落の入口の福蔵院という寺に車を置き、車が通れない古道を歩いていくと、県指定文化財の金井加里神社が見えてきました。立派な神社です。その後古道を進むと、集落の入口石造六地藏幢があります。そこから集落を見ると、写真でこの集落の主屋の特徴が良く判ります。甲州地方独特の茅葺切妻造突上げ型の主屋は、この集落で11棟現存していますが、復元された「もしもしの家」以外は全て金属屋根に葺き替えられました。

この集落は、江戸中期金山の開発で発達しましたが、その後閉山してしまい、明治中期以降養蚕が盛んになり、この独特の屋根の形は蚕を飼育するために陽当りと通風から突上げ屋根が生まれました。その典型的な建物は塩山駅前の国重要文化財指定「甘草屋敷」で見ることができます。

かつてはタバコの生産もあったそうですが、現在は果樹の栽培が中



上：金井加里神社
下：「もしもしの家」小屋裏の部屋

上：伝統的建造物主屋
中・下：集落の中央に位置する観音堂と内部の一木百観音像

心です。我が村の国道沿いに建つ「北の勢堂」が、近年茅葺屋根を葺き替えましたが、かなりご苦労されたと伺いました。でも立派な佇まいに感謝です。

集落の中心に位置するのが「観音堂」です。寄合で今も使用されていますが、重伝建の指定を受けるにあたり、NPO山梨家並保存会により茅葺屋根に修復されました。内部には微笑仏で有名な身延出身の木食白道が彫った一木百観音像が安置されています。

このお堂を見下す位置に同じNPOが復元した「もしもしの家」があります。現在1棟貸しの体験宿泊ができる主屋として存しています。集落で最初に電話を曳いたので「もしもしの家」と呼ばれたとの事。料金表が今でも残っています。呼出しや貸出もしたそうです。屋根裏部屋から見た田園風景は、果樹の花が咲く頃はそれは見事とので、春にまた来てみたいと期待が膨らみました。

(佐藤光良・道志在住 一級建築士)

お仕事拝見 ⑭ 農産物直売所マトバ「お弁当処」 西蔭 正子さん



ワイワイできる場所を提供したい

5年前、道志の自然に魅せられて移住。自然も好き!人も好きな性分なので、人の集まる「コミュニティ広場」を目指して昨年6月、「マトバ」にお弁当処を開きました。

ワイワイガヤガヤしながら村民との交流が広がっていけばいいと思っています。お弁当が結ぶ人の輪がキャッチフレーズです。よろしくお祈りしま〜す。

丼弁当
並盛 ¥500
大盛 ¥600

作画 仲井義晶

gallery 俵編みに使った「ストロ」

眼鏡ケースくらいの大きさで、角がとれ、断面がしずく型になっています。桑の木製で、ずっしりと重さがあります。カヤ(茅)をすだれ状に編むさいに、縦紐の先端につけ、錘りとして使います。

月夜野のかたによると「ストロ」と呼んだそう。各地では、「コマ」や「ツチノコ(槌の子)」、「ツツロ」「トットロコ」などと呼ばれ、木の枝をぶつ切りにしただけの円柱状のもの、真ん中をくびれさせた鼓状のもの、丸太を放射状に小割りにしたもの(写真)など、形状もさまざまでした。身近な素材で作られ、使いやすさと作りやすさを備えたシンプルな形は、ありふれた、かつ欠かせない道具だったからこそでしょうか。



編集後記

前号から10ヶ月ぶりの発行です。道志についてさまざまな視点から記した本誌ですが、はからずも今回は端々でコロナ禍について触れられたものになりました。

た。風習、手仕事、景観。変わったものは何か。変わらないものは何か。どうしてなのか。発見と関心が尽きません。(香西恵)